

JALと裁判所の「ぐるみ判決」と言われても仕方ない関係?!

6月3日と5日に出された東京高裁の判決は、地裁判決と同様に事実と証拠を無視し、会社側の主張をそのまま丸呑みにした許しがたい判決でした。更生計画を絶対視、管財人無謬論（誤りはない）の判決で、裁判官の良心や独立性などを全く感じさせず、労働者の働く権利や生活をも一切顧みない憲法蹂躪の判断そのものです。

裁判官は憲法で定められているように、良心に従い、独立し憲法と法律にのみ拘束されなければなりません。しかし、この結論ありきの判決の裏には、司法の独立性に疑いを持たざるを得ない事実（人脈）が次々と明らかになってきています。

主な登場人物と明らかになっている事実

<p>片山英二氏 (管財人)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●東京地裁 8 部から選任され、更生会社となった JAL の管財人になり、JAL の異常な労務のいうままに 165 名の解雇を強行しました。 ●一方、公的資金を受けながら、自らは JAL から毎月 580 万円の報酬と退職金 3330 万円などで、一年で約 1 億円の報酬を得ていました。 ●現在は JAL の社外監査役に就任しています。 ●東京地裁の法廷で、証人に立った片山氏に対して、渡辺弘裁判長が「片山先生」と呼ぶなど、裁判長の対応の異常ぶりが窺われました。
<p>甲斐中辰夫氏 (社外取締役)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●元最高裁判事で、不当解雇撤回裁判が東京地裁で争われている中で、JAL の社外取締役就任し、現在も社外取締役となっています。 ●破たん後、元最高裁判事の才口千晴氏が JAL コンプライアンス委員会の委員長となり、甲斐中氏は副委員長を務めてきました。 ●片山英二管財人が、コンプライアンス委員会の報告書を丸呑みにして、経営再建の陣頭指揮を執ってきました。コンプライアンス委員会の報告書を口実に経営者の責任を免罪して、社員を首切りの一方で、旧経営陣から役員に昇格させるなど、倒産族（裁判官、弁護士、学者）がグルになって JAL の破たん処理をしました。 ●オリンパス巨額粉飾決算事件では、第三者委員会の委員長で、片山英二氏は 5 人のメンバーの一人でした。
<p>大竹たかし (東京高裁 裁判長)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●客室乗務員の判決で、裁判所が選任した片山英二管財人が行った、解雇の時期・規模・内容すべて合理的であったと認めました。 ●東京地裁民事 20 部（破産・再生の担当）の部長経験者です。 ●甲斐中辰夫氏と片山英二氏が第三者委員会のメンバーであった、オリンパス巨額粉飾事件で、企業側に有利な判決を出しています。 ●大竹たかし氏と才口千晴氏は昵懇の間柄と言われています。

誰も責任を取らなかった JAL の破たん

そもそもの破たんの原因は、航空行政と JAL の放漫経営にありました。しかし、政府も歴代の経営者も責任をとることはありませんでした。

それどころか、偏った人選でコンプライアンス委員会を立ち上げ、これを利用して、経営責任や行政責任に免罪するという仕組みを使ってきました。経営破たんの引き金となった燃油のヘッジ（2008 年契約）では 1937 億円の損失を出しました。その責任者の一人であった菊山英樹氏は、東京地裁の法廷で、当時の経営状況と解雇の必要性をとうとうと述べ、現在では専務執行役員にまで昇格しています。

私たちは、労働者犠牲の再建は許さないと国民世論に訴えていきます。

